

研究会	アジア地域統合研究試論（金曜セミナー）第3回
テーマ	グローバル化とアジアの価値変動
報告者	園田茂人（アジア太平洋研究科教授）
日時	2007年11月9日（金）16時20分～18時
場所	早稲田大学19号館609教室
参加者	松岡俊二（アジア太平洋研究科教授）、黒田一雄（同教授）、寺田貴（アジア研究機構准教授）、各フェロー、院生など。

報告概要：

これまで社会学において地域統合という考え方は広く共有されていた。しかし、アジア地域を対象にした研究はほとんどなされなかった。そこで『アジア・バロメーター』（猪口孝編纂）で収集されたデータを基にして、アジア地域における価値の変動を考察した。

1、一般的にいつてアジア統合（Asian Integration）は政治学、経済学といった分野が対象にしてきた学問であり、社会学においては議論どころか関心さえない状態であった。社会学では社会統合という考えや概念はあったが、アジア地域をその対象に考察するという事はなかった。

一般的に政治学者は地域統合を考えると、最終的な難題を「価値」や「アイデンティティ」の問題にしている。（例えば、張小明、2006、「北東アジア共同体の構築に関する一考察」滝田賢治編『東アジア共同体への道』中央大学出版部、271ページ）。しかし、この問題については、社会学や文化人類学にバトンを渡すことになるのである。

アジア地域ではフィリピン、ベトナム、カンボジア、インドなどで「アジア人」という意識は高いが、それ以外の国においてはこの意識は必ずしも高くない。アジア地域においてアイデンティティは最初からバラバラである（図1）。

2、そこでアジア地域における価値変動を考察するためのアプローチを三つ考えてみる（David Held の議論を一部修正）。第一は、伝統論的アプローチであり、アジアの個々の社会が持つ価値には相対的自律性があり、グローバル化によって価値が統合するとは考えない。第二は、グローバルストアプローチ。アジア地域に留まらず、グローバルな範囲で価値が「似たようなもの」「同じような方向性」を向かせるような普遍的価値に収斂しているという立場である。第三の文化混交論的アプローチでは、アジア地域において非アジア地域とは異なる価値が生成され、「アジアらしさ」ともいえる価値が収斂し、均質化しているような現象を強調する。以上三つにそれぞれ適合するような事例を挙げてみたい。

①伝統論的アプローチに適合するような事例。

一つは、日本人の「アジア人意識」である。時間軸の変化から見ても、さらに世代別に見ても、日本人にとって「アジア人意識」は弱い（図2、3）。これは日本において自らをアジアに位置付けるという動機が歴史的に欠如してきたとも考えられる結果である。

もう一つは、アジア各国の「宗教意識」や「民族意識」である。当該意識は各国ごとに大きく異なり、国境を越えて各階層（新中間層、労働者層）の意識が似ているという結果は得られない。むしろ各国内で階層間に意識の差があまり見られないことから、国家ごとにリジッドな考え方の

パターンがあると考えられるのではないか（図4）。

②グローバリストアプローチに適合するような事例。

世界的に普遍的な価値が見られるのかどうか、という社会学では古くから議論されてきたテーマである。一つの事例は、英語化と「能力主義的価値観」である。アンケートの結果によれば、英語学習が進むに従って（英語能力が高まるほど）、身びいきのような属性原理から能力主義のような業績原理に全面的に移行していくと考えられる（図5、6）。

もう一つは、教育の事例である。世界的に見ると、自分たちの地位を上昇させるために教育が必要だという功利主義的な教育観が拡大しており、そのニーズに応えるような教育制度がつけられている（図7）。「学歴病」（ロナード・ドアー）ともいえる現象である。

③文化混交論的アプローチに適合するような事例。

強く主張できる事例はなかなかないが、いくつかは指摘できそうである。

一つは、アジア人意識の問題である。当該意識の有無をそれぞれ非説明変数とし、(a)グローバリゼーションへの接触度、(b)自国民としての誇り、(c)英語能力の三つを説明変数とする。二項ロジスティック回帰分析の結果、三つともに非標準化係数はポジティブな評価を与えている。つまりグローバリゼーションへの接触度が高いほど、また自国民としての誇りが高いほど、さらに英語能力が高いほどアジア人意識が高いというパラドキシカルな結果が得られるのである（表）。

もう一つは、政治学、経済学などではほとんど注目されることのない食文化の問題である。キムチを事例に取り上げてみよう。一部の国で例外はあるものの、おおまかにいえばアジア地域においては若い層（特に20代）になるに従って、キムチを好んで食べる者の割合が似通っている。これはアジアにおける文化混交の一例といえるのではないか。

3、要約と討論。三つのアプローチからそれぞれ視点を変えて現象を見るだけでも結果が大きく変わることが分かる。なかでも文化混交論的アプローチをとることで、アジアにおける価値の「アジア化」（ある種の価値がアジア地域のなかにとどまり共有されているような現象）を論じることが不可能ではないといえそうである。ただし、過剰な一般化を避けながら、アジアにおいてどのような価値が似通っていて、何が異なるかを経験的根拠に基づいて考察するという課題は残されている。

質疑応答：

1、「価値」についての作業定義は何かという質問があった。これに対して、最終的な定義は保留しながらも、制度化を伴う規範（ある社会において支配的なもの）よりも広い概念（人々の行動を方向付け、誘発するようなもの）を想定しているという回答がなされた。

2、データ収集において科学性や恣意性をどのように考えるかについて討論された。

3、国際関係や教育学の立場からアジア統合において経験的根拠や具体的政策という次元と理念やアイデアという次元をどのように均衡させるべきかが重要だという指摘があった。

記録：松村史紀（GIARI アジア地域統合フェロー）

編集：上久保誠人（GIARI 特別研究員）